111

石郷（いしごう）遺跡

（鹿児島市吉野町上ノ原石郷）

位置と環境

鹿児島市街地の北方にひろがる吉野台地の東縁辺部にある。標高240m桜島を眼前に望む景勝の地である。この最も高い所に鹿児島地方気象台上高層観測室敷地跡があり，その一隅に昭和16年３月鹿児島市による石碑が建てられている。銘文は61年の風雪に耐え，現在でもはっきりと読みとることができる。「史前民族ノ遺跡ニシテ縄文土器ヲ出土ス。大正４年英人エヌジーマンロー此地ヲ発掘調査シ学界ニ発表ス。當時斯種土器ハ，所謂アイヌ式ト稱セラレ，九州地方ニ於ケル最初ノ発見地ナリ」

この場所を中心とする一帯が遺跡地である。

写真１　石器時代遺跡記念碑　平成13年12月撮影

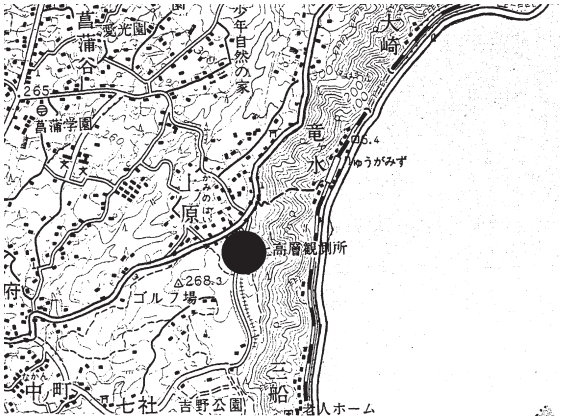
調査の経緯

石郷遺跡は大正４年（1915）英人ＮＧマンローによって調査された。鹿児島における最初の考古学的調査の行われた記念すべき遺跡として知られている。その後発掘調査は行われていない。近年開発に伴う事前の確認調査が鹿児島市教育委員会によって行われたのみである。

遺構と遺物

マンローの調査によると13個の柱穴と赤土に掘り込まれた不正円形の竪穴が発見されており，住居跡と推定されている。

また河口貞徳は採集資料から縄文時代早期・中期後期の遺跡として，石坂式，阿高式，岩崎上層式，指宿式，鐘崎式，市来式，草野式土器などをあげ，



第１図　石郷遺跡の位置

市来式が最も多く，次に指宿式で縄文後期を主とする遺跡としている。

昭和62年３月には桜井親雄氏の畑で，竹根の除去中，地下90cmあたりのところから多量の成川式土器が発見されている。古墳時代の集落跡も予想される。

鹿児島市教育委員会による平成10年の気象台敷地の記念碑近くの確認調査（Ａ地点）では，表土下にアカホヤ層がみられ，縄文前期以降の層がみられなかった。また早期土器も確認できなかった。

平成13年の気象台敷地南側（Ｂ地点）の畑地の確認調査では，良好の層位の堆積状況がみられ，土師器，成川式土器などを採取した。地表下１ｍ付近に土師器と成川式土器の包含層がみられる。

特徴

遺跡はまだ本格的な調査が行われていないので，マンローの報告と採集資料からのわずかな情報でしか推測できない。しかし，この一帯は現在でも遺物の散布がみられ，地主の聞きとり調査からも遺跡の良好な残存状況を予想させるものがある。

資料の所在

マンローの調査した資料はケンブリッジ大学に保管されているといわれている。

参考文献

ニール・ゴールドマン・マンロー（津田敬武訳）1915「太古の大和民族と土蜘蛛」『考古学雑誌』第６巻第４号

（出口　浩）